

# ダニエルの書 - 第四百十九号

啓示された神の奥義：神性と人間性の一致

Jeff Pippenger

2024-03-21

私たちはこれまで、ダニエル書十一章四十節に表されている歴史を考察してきた。現在は、その節に内在する歴史の展開、すなわち地から上ってくる獣のプロテスタントの角の歴史を表す部分を扱っている。私たちは、第三天使が到来する時に、キリストがその神性を人性と結合させることによって顕される「神の奥義」を識別するための基準点として、エゼキエル書三十七章における二本の棒の結合を用いている。行に行を重ねる原則に従えば、第七のラッパが鳴り響く間に完成するとヨハネが示した「神の奥義」のメッセージは、使徒パウロによって特にラオデキヤに宛てて送られたものであった。エゼキエル、ヨハネ、パウロの証言は、1888年にジョーンズとワグナーによって提示されたメッセージ、すなわちラオデキヤへのメッセージにおいて表現されたのと同じの「神の奥義」と一致している。

私は、あなたがたのために、またラオデキヤにいる人々のために、さらに直接私に会ったことのない多くの人々のために、私がどれほど大きな苦闘をしているかを、あなたがたに知ってほしい。これは、彼らの心が励まされ、愛によって結び合わされ、理解における完全な確信のあらゆる富に至り、神の、すなわち父とキリストの奥義を知るに至るためである。キリストのうちに、知恵と知識の宝はすべて隠されている。コロサイ人への手紙 2章1-3節。

神性と人性という二本の棒を結び合わせる贖いの働きは、第三の天使が到来したときに始まった。しかしパウロが語っているのは、神の奥義であるその二本の棒の結合の最終的かつ完全な成就である。したがって彼は、そのメッセージをラオデキヤへのメッセージと特定し、それは最初に1856年に到来し、1888年に繰り返され、そして2001年9月11日に完全に成就したとする。パウロは、神の奥義を提示したとき（それは第七のラッパが鳴り響くときに完成すべきものであった）、神殿を二重の性質をもつものとして示している。彼はその奥義を、かしらとからだに分ける。

そして、彼は、からだ、すなわち教会のかしらである。彼は初めであり、死者の中から最初に復活した方であって、すべてのことにおいて第一となるためである。というのは、父は、すべての満ち満ちたものが彼のうちに宿ることをよしとし、また、彼の十字架の血によって平和を打ち立て、彼によって万物を御自身と和解させられたからである。すなわち、地にあるものも、天にあるものも、すべてを彼によって、かつては、あなたがたは悪い行いのゆえに心において神から離れ、敵であったが、今は、彼の肉のからだにおいて、死によって、あなたがたを神の御前に聖く、傷なく、非難されるところのない者として立たせるために、和解させてくださった。ただし、あなたがたが、聞いた福音の望みから動かされることなく、信仰に基礎づけられて堅く立ち続けるならばである。その福音は、天の下のすべての被造物に宣べ伝えられており、私パウロはその奉仕者とされた。今、私は、あなたがたのための私の苦しみを喜び、キリストの患難の欠けたところを、彼のからだである教会のために、自分の身におい

て満たしている。私は、この教会の奉仕者とされた。あなたがたのために私に与えられた神の委託に従い、神の言葉を全うするためである。コロサイ人への手紙 1:18-25。

キリストは、すべてにおいて首位を占めるべき頭であり、キリストの教会はそのからだである。頭とからだは共に、神性と人性の結合を表しており、さらにもう一つの重要な事実も示されている。頭とからだの関係は、頭がからだの上にあって優位にあるということである。神のかたちに造られた人間においても、高次の能力（頭）が低次の能力（からだ）を支配することになっている。これらは共に一つの存在を形づくっており、あるいはヨハネが測ることになっていた神殿の用語でいえば、聖所（人性、からだ）と至聖所（神性、頭）を表している。これら二つが「一本の棒」、すなわち一つのからだに結び合わされることは、「at-One-ment」のわざである。パウロは続ける。

私は、この務めのために奉仕者とされた。それは、神があなたがたのために私にお与えになった委託に従い、神の言葉を余すところなく知らせるためである。すなわち、世々、代々にわたって隠されていた奥義であるが、今や聖徒たちには明らかにされたものだ。神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間でどれほど栄光に富むものであるか、すなわち、あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の望みであることを知らせようとした。私たちはこのキリストを宣べ伝え、あらゆる知恵をもって、すべての人を戒め、すべての人を教える。それは、すべての人をキリスト・イエスにあって完全な者として立たせるためである。このために私は、私のうちに力強く働くその御力に従って、勞し、奮闘している。コロサイの信徒への手紙 1:25-29。

「キリストにあって各人を完全な者とする」ことを示す十四万四千人の完成は、「神の奥義」であり、それは神性と人性の結合、すなわちパウロの言い方では「人類のうちにあるキリスト——栄光の望み」である。第七のラッパが吹き鳴らされる時、その奥義は成就する。エゼキエルはその結合を示すために二本の棒を用い、北王国のために一本、南王国のために一本とし、数「四十六」によって神殿を表す象徴的な結びつきを指し示す。「四十六」という象徴的な結びつきの棒は、「二百二十」という象徴的な結びつきと結び合わされる。

二百二十という数は、神性と人間性が結び合わさった象徴である。1611年に King James Bible が刊行され、1831年に Miller's message が初めて提示され、その後1833年に Vermont Telegraph にそのメッセージが掲載された。1611年から1831年までが二百二十年である。Miller's message は、1798年にダニエル書の封印が解かれたとき、聖書から得られた知識の増加を正式に体系化したものであった。1611年という始まりの日付には神的な文書が発行され、1831年という終わりの日付には、1798年に封印が解かれた神の真理に基づく人間による出版物があった。

それら三つの日付は、二百二十年を表すだけでなく、ヘブライ語の「真理」という語の構造も表している。「真理」は、ヘブライ文字の第一・第十三・最後の文字を組み合わせで作られる語である。初めに神の布告があり、終わりに人間の布告がある。そして1798年は、知識の増大を表しており、その知識を拒む邪悪な者たちの一群が顕在化することになる。ゆえにそれは、反逆の象徴である第十三の文字をも表す。その二百二十年の連関は第一の天使の運動において確立され、第三の天使の運動が第二の証しを与える。

1776年、神的な文書である『独立宣言』が公表され、その二百二十年後の1996年には、人間的な文書である雑誌『The Time of the End』が刊行された。その人間的な文書は、1989年の終わりの時に生じた知識の増加から派生したが、それは1798年の場合と同様に、『独立宣言』によって表される神のメッセージに対する反逆を生み出した。1996年における知識の増加は、間もなく到来する日曜法において、アメリカが1776年に宣言した自由と独立を失うという将来を明らかにした。これは、二百二十という数が神性と人性の結合を表すことを示す第二の証しを与えるものであり、その第二の証しは「真理」と署名を付して提示され、第一の天使の歴史（初めのもの）における第一の証しと、第三の天使の歴史（最後のもの）における第二の証しによって表象された。

また、1776年は、聖書予言における第六の王国としての地から上って来る獣の実際の始まりに先立つ準備期間の始まりをも画した。その準備期間においては、真理の徴が再び、1776年（合衆国の始まりを画する）と1798年（聖書予言における第六の王国としての合衆国の始まりを画する）によって指し示された。その起点と終点には含まれた歴史の中央に当たる1789年は、十三植民地が憲法を批准し、中央の一字をなした。これら三つの日付はいずれも、合衆国の「語ること」を表している。すなわち、1776年の独立宣言、1789年の合衆国憲法、1798年の外国人・治安法である。この歴史は二十二年を表し、それは二百二十の十分の一、すなわち十一に当たるため、神性と人性の結合の象徴でもある。

その表現は、始まりは子羊（神性）、終わりは竜（人間性）として描かれる地の獣の歴史を示している。1776年は、神性を示す独立宣言で始まり、外国人・治安諸法が人間性を表している。そして、聖書の預言において第六の王国としての地の獣の支配が始まるまでのその22年間に、子羊から竜への移行が象徴されている。

ユダ南王国に対する二千五百二十年の裁きの起点は、ダニエル書八章十四節の二千三百年の起点と結びついている。ユダにおける聖所と軍勢の蹂躞は紀元前677年に始まり、その二百二十年後の紀元前457年に二千三百年の預言が開始した。ユダ南王国の杖は、四十六という象徴によって北王国と結び合わされており、また二百二十という連関によって二千三百年とも結び合わされている。

パウロは、自分が神の経綸に仕える奉仕者であると述べ、彼が仕えるその経綸を、神の奥義、すなわち「あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の望み」であると定義した。さらに彼は、テモテに宛てた書簡の中でもこの真理に言及している。

そして論争の余地なく、敬虔の奥義は大いなるものです。神は肉において現れ、御霊において義とされ、天使たちに見られ、異邦人に宣べ伝えられ、世において信じられ、栄光のうちに上げられた。テモテへの第一の手紙 3:16。

ここでパウロは、敬虔の奥義とは、肉において現れた神であると言っています。神はかしらであり、肉はからだです。敬虔の奥義とは、信者のうちにあるキリストであり、すなわち神性と人性の結合です。パウロはまた、ホセアがそうしたように、結婚の比喩も用いています。

私たちは彼のからだの肢体であり、その肉と骨なのです。それゆえ、人は父と母を離れ、妻と結ばれ、二人は一体となるのです。これは大いなる奥義です。私はキリストと

教会について語っているのです。エフェソの信徒への手紙 5:30-32

第三十七章において、エゼキエルは終末の契約、すなわち十四万四千と特定される者たちとの更新された契約を明確にし、二本の棒の合一を示す譬えを与える。その二本の棒は、行に行を重ねて、ホセアおよびパウロの婚姻の比喻を含んでいる。それらが結び合わされるとき、両者はもはや二つの国民ではなく、一つの国民となり、永遠にそうである。

わたしは彼らをイスラエルの山々の地で一つの国民とし、彼らすべてに一人の王が王となる。彼らはもはや二つの国民ではなく、二つの王国に分かたれることも決してない。彼らはもはや偶像によっても、忌むべきものによっても、いかなる背きによっても自らを汚すことはない。だが、彼らが罪を犯したそのすべての住まいから、わたしは彼らを救い出し、彼らを清める。こうして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。エゼキエル書 37:22、23。

エゼキエルの「結び合わせ」は、彼らがもはや分裂せず、もはや罪を犯さず、清められ、神が彼らの唯一の神となり、彼らにただ一人の王が与えられる時を示している。10月22日、契約の使者が突然神殿に来て、民を「清める」ために来られた。彼は王国を受けるために来られ、その民はペテロによれば、そのとき祭司と王から成る王国となるはずであった。その日に花婿もまた婚礼に来られたが、これはパウロとホセアが指し示す奥義であり、神性と人間性の結合を表している。ヨハネは、パウロが「あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の望み」と呼ぶその奥義が、第七の天使がラッパを吹き鳴らす日のうちに完了すると示している。

しかし、第七の御使いの声が響き、彼がラッパを吹き鳴らし始めるとき、神の奥義は成就する。神がそのしもべである預言者たちに告げられたとおりである。黙示録 10:7

第七の天使は第三のわざわいであり、それは2001年9月11日に到来した。第七の天使は、1844年の歴史において第三の天使が到来したとき、そしてその後も、ラッパを吹き始めたが、1863年の反逆のために、その働きが完了することは妨げられた。2001年9月11日には、第三の天使が到来し、第七のラッパが再び鳴り始め、今回は「神の奥義」が「成就」することになっている。その「奥義」とは、神性と人性の結合であり、それによって十四万四千人が生み出され、彼らはやがて神の旗印と軍勢となる。このゆえに、エゼキエル書三十七章は、エゼキエルが死に絶え干からびた骨の谷へと連れて行かれる場面から始まる。その骨は、2001年9月11日におけるラオデキヤ的アドベンチズムを表しており、このためにパウロは「神の奥義」の福音をラオデキヤ人に宛てている。

私は、あなたがたのために、またラオデキヤにいる人々のために、さらに直接私に会ったことのない多くの人々のために、私がどれほど大きな苦闘をしているかを、あなたがたに知ってほしい。これは、彼らの心が励まされ、愛によって結び合わされ、理解における完全な確信のあらゆる富に至り、神の、すなわち父とキリストの奥義を知るに至るためである。キリストのうちに、知恵と知識の宝はすべて隠されている。コロサイ人への手紙 2章1-3節。

これはまた、シスター・ホワイトがエゼキエル書の死んで干からびた骨に関連づけている描写でもある。

しかし、この干からびた骨の比喻は、世に当てはまるだけではない。大いなる光にあずかった者にも当てはまる。彼らもまた、谷の骸骨のようだからである。彼らは人の形、からだの骨組みは持っているが、霊的ないのちはない。だが、このたとえば、干からびた骨がただ人の形に結び合わされただけのところで終わらない。肢体や容貌の均整があるだけでは十分ではないからである。いのちの息がそのからだに吹き込まれ、直立し、活動へと踏み出すように生かされねばならない。これらの骨はイスラエルの家、神の教会を表しており、教会の希望は聖霊のいのちを与える御働きにある。主が干からびた骨に息を吹き込み、それらが生きるようにしてくださらねばならない。

神の御霊は、その命を与える力とともに、すべての人の内におらねばならない。そうしてこそ、あらゆる霊的な筋肉や腱が働くのである。聖霊、すなわち神の息がなければ、良心は鈍麻し、霊的ないのちは失われる。霊的ないのちを持たない多くの者は教会の名簿には名を連ねているが、小羊のいのちの書には記されていない。彼らは教会には連なっているかもしれないが、主には結び合わされてはいない。彼らは定められた一連の務めの遂行には勤勉で、生きている者と見なされるかもしれない。しかし、「あなたは生きているという名を持っているが、死んでいる」と言われる者たちのうちに多くがいる。

魂が真に神に立ち帰るのでなければ、神のいのちの息がその魂を霊的ないのちに生かすのでなければ、真理を公言する者たちが天来の原則に動かされるのでなければ、彼らは永遠に生きてとどまる朽ちることのない種から生まれた者ではない。彼らがキリストの義を唯一の拠りどころとして信頼せず、その品性を見習い、その霊にあって労しないなら、彼らは裸であり、彼の義の衣をまとっていない。死んだ者が生きている者として見なされることはしばしばある。というのも、自分の考えに従って自分たちの言う「救い」を成し遂げようとしている者たちのうちには、神が御心のままに志させ、行わせるために働いておられないからである。

「この種の人々は、エゼキエルが幻の中で見た干からびた骨の谷によってよく象徴されている。」 Review and Herald, 1893年1月17日。

ラオデキヤのメッセージは1856年にアドベンチズムにおいて初めて提示されたが、それはちょうど主がレビ記26章の「七つの時」に関する進展する光を開かれた年であった。悔い改めを求める内的なメッセージと、外的な預言のメッセージから成っていた1856年のそのメッセージは、1863年に退けられた。「あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の望み」という奥義に関するラオデキヤのメッセージは、1888年にジョーンズ長老とワグナー長老によって繰り返し述べられ、そのメッセージがラオデキヤへのメッセージであることはホワイト夫人によっても認められた。

行に行を重ねて見ると、エゼキエル書三十七章は、エゼキエルが霊において2001年9月11日に連れ移され、そこにおいて、罪と咎の中に死んでいるラオデキヤ的アドベンチズムの姿を示されることから始まる。彼は二つの明確に区別された預言的メッセージを告げるよう命じられる。第一のものは結び合わせをもたらすが、からだはなお死んだままである。第二の預言は、「四つの風」のメッセージが骨にいのちの息を吹き込むことを求める。四つの風のメッセージとは、十四万四千人の封印のメッセージであり、四つの風を押さえている四人の天使を指し示すものである。ホワイト姉妹は、その四つの風を「怒れる馬

」と同定しており、それは抑えられているがゆえに、束縛を振り切ろうとしている。イスラムの怒れる馬は、束縛を振り切って解放されようとしており、その進むところに死と滅びをもたらそうとしている。2001年9月11日にそうしたように、間もなく到来する日曜法の時に、再び解放されるであろう。

そのメッセージは、死せるからだを、自らの足で立つ統一された軍勢へと変える。その統一された軍勢は、第七の天使のメッセージに応じて立たされる。なぜなら、第七の天使がラッパを吹き鳴らすその日々に、十四万四千人のキリストとの婚姻の奥義が成就するからである。

それから、エゼキエルは、二本の棒が結び合わされて一つの国となることを示される。その二本の棒とは、イスラエルの北王国とユダの南王国のことであり、二千五百年に及ぶ双方の離散期間の終わりに、一つの国として結び合わされる。双方の終結は霊的な神殿を生み出し、その神殿は、双方の離散期間の初めと終わりにある四十六年間によって象徴されている。

次回の記事でこの研究を続けます。

「そして彼らは朝早く起きて出発し、テコアの荒野へ向かった。彼らが出て行くと、ヨシャパテは立って言った。『ユダよ、またエルサレムの住民よ、わたしの言うことを聞け。あなたがたの神、主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅く立つ。主の預言者を信じなさい。そうすればあなたがたは栄える。』歴代誌下 20:20」

「あなたがたの神である主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅く立てられる。彼の預言者を信じなさい。そうすればあなたがたは栄える。」

イザヤ書8章20節。「律法と証しに尋ねよ。もし彼らがこの言葉に従って語らないなら、彼らのうちに光がないからだ。」

ここに、神の民の前に二つの聖句が示されている。成功のための二つの条件である。エホバみずからが語られた律法と預言の霊は、あらゆる経験においてその民を導くための知恵の二つの源である。申命記 4:6。「これは、諸国民の前におけるあなたがたの知恵と悟りである。彼らは言うであろう、『まことにこの大いなる国民は、賢く悟りのある民である』と。」

神の律法と預言の霊は、教会を導き助言するために手を携えて働いており、教会が神の律法に従うことによってこのことを認めるたびに、預言の霊が真理の道へと教会を導くために遣わされてきた。

黙示録12章17節。「そこで、龍は女に対して激しく怒り、神の戒めを守り、イエス・キリストの証しを持つ、彼女の子孫の残りの者たちと戦いをしようとして出て行った。」この預言は、残りの者の教会が神の律法を重んじ、預言の賜物を持つことを明確に示している。神の律法への従順と預言の霊は、常に真の神の民を見分けてきたものであり、その試しは通常、現在の現れにおいて課される。

エレミヤの時代、人々はモーセやエリヤ、エリシャのことばには何の疑いも抱かなかったが、神がエレミヤに与えられたことばについては疑い、それを退け、その力と勢いが空しくなるまでそうし続け、ついには神が彼らを捕囚に連れ去るほかに救いの手

立てはなくなった。

同様に、キリストの時代には、人々はエレミヤのメッセージが真実であったことを知っており、もし自分たちが父祖の時代に生きていたならばそのメッセージを受け入れたはずだと自分たちに言い聞かせていたが、同時に、すべての預言者が書き記していたキリストのメッセージを退けていた。

神の律法をその全き姿と力において教会に明らかにするための第三天使のメッセージが世に現れたとき、預言の賜物もまた直ちに回復された。この賜物は、このメッセージの発展と推進においてきわめて重要な役割を果たしてきた。

聖書の解釈や働きの方法をめぐる意見の相違が生じ、そのことがメッセージを信じる者たちの信仰を動揺させ、働きに不一致をもたらしかねない状況になるたびに、預言の霊は常にその状況に光を投げかけてきた。それは常に、信徒の群れに思いの一致と行動の調和をもたらしてきた。メッセージの展開と働きの中で起こったあらゆる危機において、神の律法と預言の霊の光のもとに堅く立った者たちは勝利を収め、働きは彼らの手によって栄えた。ロマ・リンダ・メッセージズ, 34.